

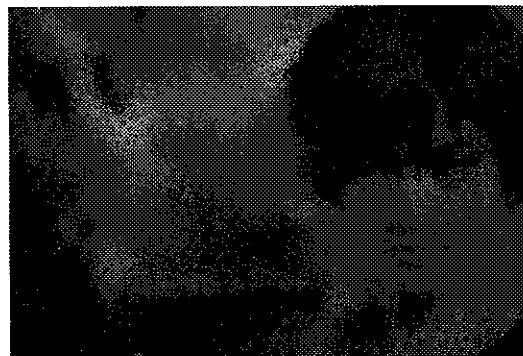
2012年度前期

13:00~16:30

松村浩行監督作品

# HOWS講座6/2(土)上映と討論会

# 『よろこび』



『よろこび』(1999年/16mm/32分)  
監督・脚本:松村浩行 出演:遠山智子、西山洋市、万田邦敏、ほか



『YESMAN/NOMAN/MOREYESMAN』(2002年/DV/70分)  
監督:松村浩行 出演:FelixOwusu、永野雄太、凌雲鳳、ほか

『よろこび』について——若者としての映画作家の肖像

『よろこび』の世界、それは出来事と出来事をつなぐ「ねじ」が思い切り、吹きだすほど滑稽に外れていながら、ふと気が付くと我々の「世界」に双子のように似ている。そこには、何かを生産しながら何も「創造」できない賃労働があり、言葉と実践の乖離を放置する資本家の欺瞞が、決して自分は手を汚さない新左翼の虫のいい煽動があり——何より、誰もが熱狂する高揚期には絶えず逡巡し、彼らが疲弊し放棄しかける時こそ最後まで闘争を引き受ける、一人の少女の断固たる「出発」がある。だが、この映画をようやくスクリーンで見た後、私が最も忘れられずにいるのは、フルートや熊鈴の澄んだ響きだ。樹木を這いずる無数の蟻の生命の歓喜だ。それは、私達の聴覚や視覚が巧みに操作されたからなのか。それとも、若い松村浩行自身がその無上の「よろこび」を、『YESMAN / NOMAN / MORE YESMAN』から『TOCHKA』に至る避け難い予感のざわめきを、恥も外聞もなく、手探りで必死に歌い続けたからなのか。私は今、心から願っている。あの「リズム社」で労働運動がしたい。羊の大群さながら急斜面をなだれ落ちる若者達を、息を切らして追いかけて。さわやかな森の外気を胸一杯に吸いこんで、我々自身の革命的な「未来」を賭けるようにして(決して愛を語るためではなく)、「眠っちゃだめだ」と全てのアオシギの耳元でささやいてほしい。(二〇一一年秋、「岡山人民映画会」プログラムC「労働」短編集「終了後の感想から」)

鎌田哲哉

場所 | 本郷文化フォーラムホール (裏面参照)

受講料 | 1500円 (学生1000円) (本講座は当日受付ですが、席に限りがございます。ご予約受付可)

# 『YESMAN / NOMAN / MORE YESMAN』

<あらすじ>

数十名の労働者が黙々とドラムを叩いている。「リズム社」の仕事とは、ひたすら「リズム」を生産することにある。ベテラン労働者の松本は、はたちの娘アオシギに、会社をクビになったことを告げ、去っていく。松本の代わりに入社したのは、ロカビリーくずれのダイゴだった。ダイゴに興味をひかれるアオシギ。ある日の昼休み、ダイゴはアオシギに「君は幸せなのか？」と声をかける。「このむなしい繰り返しを断ち切るんだ。人生を変えるんだ」やがてダイゴは、ドラムを乱打し、全体のリズムを乱し、会社を飛び出していった。数日

ご覧くださる方と、ご覧くださった方のために！  
映画『YESMAN/NOMAN/MORE YESMAN』はドイツの劇作家ブレヒトの戯曲 Der Jasager und Der Neinsager (1931) を映画化したものだ。この作品は『イエスマン ノーマン』という日本語題で知られ、未来社から出ている岩淵達治訳ブレヒト全集でも読むことが出来る。もともと僕が『イエスマン ノーマン』という作品に興味を持ったのは、そのいっふう変わったなりたちに強く惹かれたからだった。そしてその関心こそが、この映画の特異な構成にも影響しているのだった。

(中略) 改稿版「ノーマン」のあり得べき可能性を考えることこそおもしろいと、撮影前にお会いした

後、アオシギは、かつての同僚の松本と再会する。「人生の意味っていうものを忘れてしまった人間は死んだも同然です」と松本。「それが会社を辞めた理由なんですか？」とたずねるアオシギ。「あなたはどうなんですか？」と問い返す松本に、アオシギは「わからない」と答えるしかなかった。一方、ダイゴは、路上で横笛を吹いていた謎の四人組に「リズム社」のドラム強奪を提案する。深夜、悩めるアオシギは、決意を胸に秘め「リズム社」に忍び込む。暗闇の中、彼女はドラムを盗もうとする四人組と出会うのだった……。

時、岩淵先生もおっしゃっていた。しかし、僕は自分の頭だけで改稿版「ノーマン」、すなわち「MORE NOMAN」を考え出すことにまったく興味がなかった。改稿版「ノーマン」をめぐる僕の興味は、かつて初稿「イエスマン」の上演を観たカール・マルクス学校の生徒たちがしたような討論を現在の同年代の子供たちが再びおこなうこと、そしてそのプロセスを映画的に記録することだった。さらにその討論を通じて形成されたあるひとつの(多分に暫定的な)コンセンサスをもとに、もう一度劇化=映画化することだった。(後略)

(『狂気の手』公式HP「YESMAN/ NOMAN/ MORE YESMAN」ノート (松村浩行) より抜粋)

## 松村浩行

北海道札幌市生まれ。

早稲田大学第一文学部卒業後、映画美術学校で映画制作を学び始め、初監督作品『よろこび』がユーロスペースで公開後、2000年フランス・エクサンプロヴァンス短編映画祭、2001年ドイツ・オーバーハウゼン国際短編映画祭など、海外映画祭に招待され、オーバーハウゼン国際短編映画祭では国際批評家連盟賞を受賞する。『TOCHKA』は第22回東京国際映画祭「日本映画・ある視点」部門公式出品作品として選ばれた。

## HOWS

HOWS (本郷文化フォーラムワーカーズスクール) は、働き、生活するものの立場から、状況を変革するための思想と文化を講師・受講生が共に討論しながら創りだそうとする共学の間です。学ぶだけでなく、行動し、働くものの国際的な連帯をつくりあげることを目指しています。今年度前期講座は、7シリーズ28講座を準備し、5月12日に開講しました。シリーズ5「時代を変革する芸術」の第1回目の当講座に映画監督の松村氏をお迎えして短編映画の上映と討論を行ないます。

